

南風

くみなみかせく

寺報 第十一号

平成二十六年 夏

〒543-0063 天王寺区茶臼山町二-三十六

電話 〇六一六七七九-九四三五

〇六一六七九四-〇五八三

携帯 〇九〇-二〇四八-三二八九

真宗大谷派 松濤山 南照寺(なんしょうじ)

編集 発行 南照寺住職 友澤秀三

今年の大阪は空梅雨のようです。いつのまにか長男と次男が喧嘩しながらも、黄色い帽子を並べて毎日元気に登校するという光景が、ごく普通の日常になりました。

先回書いた後さらに、東大阪にある、これまでお参りに支障の出た寺院から御依頼がありまして、こちらもお手伝いさせていただくこととなりました。次々とお役目を授かるのですが、なかなか慣れない事が続く中、どんな変化にも事もなげに順応していく小学生に、あらためて学ばねばなあと感じております。

私の力不足で、しばらく寺報は滞っておりますが、その間も変わりなく第三土曜日の二時から「お勤めの会」は継続しております、距離の遠い御門徒方とも、直接お会いして歓談できる有り難い機会として、お喜び申し上げます。先回もいろいろ話す中で、いくつかの懸案が持ちあがりましてしたので、報告させていただきます。

本堂の前の縁側から墓地に至るまでに、石で四段ほどの階段が整備されています。まだ新しくつやつやしてきれいなのですが、すこし足の弱ってきた方々すれば、角の部分などで怪我をするのではと、少なからず不安に思う向きがあ

り、将来的なことも考えて、寄りかかっても大丈夫な手すりをつけたらどうか、という御提案には、皆さん快くご賛同いただけました。そのことは総代会でも発題いたしました。即承認いただけましたので、近々着工いたします。段の東側、石燈籠の前にステンレス製のものを一つだけ、設置する予定です。

昨年末から、本堂横の庫裏に毎日出入りするのですが、宿泊する機会が多い中、シャワーの故障に困惑しており、その修理とそのほか老朽化した水回り等の改善を考えている旨、お話しさせていただきましたところ、これもまた御賛同いただけましたので、やはり総代会で俎上にあげさせていただきました。役員方全員に現状を視察いただいた結果、やはり抜本的な改装は必要との意見を承認いただき、こちらも合わせて進めさせていただきました予定です。いずれにしても大工仕事ですので、少しの期間落ち着かないような事になります。少しの期間落ち着かないよう、宜しくお願いいたします。

お盆の季節が近づいてまいりました。今年からは本堂で「お盆」の法要を勤めたい、と考えております。

「盂蘭盆会」(うらぼんえ)

八月十四日、午後二時より

於 南照寺本堂

御経、正信偈の後、御文があがります。そのあと、お話をさせていただきます。どなた様も、ようこそのお参り、お待ち申しあげております。

一三、十四、一五日は坊守が居ります。

坊守に御用の方は、この間にお参りいただけますよう、重ねてお願いいたします。

去る六月二七日、伏見別院の「御命日の集い」の法話を仰せつかい、午後から京都へ参りました。この五月に落慶したばかりの真新しい本堂で、直参の御門徒に囲まれながら、去年からの続きの話をするのはいささか気が引けたのですが、自分の中で言葉が足らなかつたところだけでもきちんとお伝えしておかねば、と思つて敢えて古いレジュメも新しいものと一緒に用意してお渡しいたしました。

抜粋、採録いたします。

「他の動物の餌食になる立場」であつた人間が、身を寄せ合つて生きる「社会」を作りました。その時に人類が選んだルールこそ、今も「家族」の中で見出し得るものでしょう。

曰く、

- ・資源の共有という平等主義「わかちあい」。
- ・徹底的な分配と交換を通じた社会関係。
- ・権威をおさえる仕組み。
- ・互酬ではない、見返りを求めない向社会的な感情に支えられている。
- ・共感と同情の精神が何のためらいもなく発揮される集団。

捕食者に襲われなかったためには、数を増やしたい……より多く集まつて生活できたのは、農耕して蓄財できるようになつたからです。あらゆる「差異」が同時に生まれ、奪い合い、戦争が始まります。人間の存在が人間を害するようになり、ついには「老病死」についても、他者との比較関係で「苦」（思い通りにしたいけれども出来ないものとしての「苦」）とせざるを得ない、ということの方が主要な問題となつてしまいました。世界を引き受けられない「私」が出現するのです。

逆説的ですが、社会が一時的にでも破壊すれば、そこに「浄土」性が現れる。現れざるを得ないので。不意に、無意味に殺されるかもしれない状態が無期限に続くとき、過去に成功した「ルール」以外に、一体どんな戦略があるで

しょう。

我々は豊かで安定した社会を望み、またそれをより完全なものにしようとして日夜努力しております。浄土は十億土の彼方であります（真宗聖典二十八頁）。今ここでは時間軸で考えてみるべきでしょう。そうしてみると確かに日々、離れ続けていっている。しかしただ一種類、我々ホモ・サピエンスだけが、滅亡した多くの他の人類と、おそらく違つた「戦略」で生き残つたのだ、という事実を、今も生き続けています。遺伝子の中にしつかりと書き込まれている、本能的な「ルール」に思いが至るとき、「阿弥陀仏、ここを去りたまふこと遠からず」（真宗聖典九十四頁）ということが、言葉の上での矛盾を超えてはつきりしてくるのではないか、と思ふのであります。

遠い原始時代に「阿弥陀仏の極楽浄土」の原型を見出し得る、というような胡乱な話でしたが、熱心に聞いていただいた上、その後の質問も活況で、結果、こちらもまた問いをはつきりさせることが出来たようなことでした。

有り難い御縁でありました。

思想は同時代的に「共有される」もののように、それゆえ二〇一二年四月に、やはり伏見別院で話した「慈悲に聖道・浄土の〈替わり目〉あり」といったような管見が、七月号の南御堂新聞トップで「大谷派の新しい指摘」として取り上げられるということが起こり得るわけです。その意味で、今回の私の「珍説」も「スタンダード」にならないとは限りません。……残念ながらこの記事では、教授の書いた漢字が間違つておりますので、指摘しておきます。

「お勤めの会」は第三土曜日、七月十九日ですが、八月は十四日、盂蘭盆会と兼ねる予定です。ご注意ください。九月二十日は、秋季永代経と彼岸会とを兼ねて厳修いたします。